

私の青春

長崎県立上五島高等学校3年（長崎県）

鈴木 鈴

私の茶道人生は2年半前、高校1年生の時に校舎一階の片隅にあるお茶室に足を踏み入れたことから始まりました。3年生3人、2年生1人の中に、たった1人の新入部員として入部したため、とても緊張していました。入部の決め手は中学生の頃からお世話になっていた先輩がいらっしゃったことでしたが、その先輩も6月には引退してしまうので、入部当初の不安は大きかったです。しかし、4人の先輩方は後輩である私が気を遣わせてしまったのではないかと心配になるほど、良い意味で上下の隔たりを無くしてくださるような優しい方たちでした。

それから1年の時が流れ、2つ上の先輩方が卒業し、1つ上の先輩が引退という時期になりました。新入部員のいなかった茶道部は、私一人で活動することになりました。新型コロナウイルスの影響もあり、飲食を伴う茶道は思うようにお稽古ができず、活動の規模が小さくなりました。学校の先生方の中には、校内にある茶室の場所をご存知ない方もいらっしゃいました。

今年の4月も、新入部員が来ることはありませんでした。私の引退と同時に、茶道部の廃部が決まった瞬間でした。夏休み前、校長先生と顧問の先生から直接廃部になることを聞きました。そして、茶道を教えてくださいました先生へ、これまでの感謝の気持ちを込めて花束をお渡しする役を任せられました。当日、着物に身を包み、ステージ上でお話しされる先生を見て、本当に終わってしまうのだと実感しました。そのお話の中に「守破離」の言葉が出てきました。

「規矩作法 守り尽くして破るとも離るとても本を忘るな」

先生は自分が今置かれている状況としてお話しになりましたが、その時の私には、先生から私へのはなむけの言葉にも思えました。部活動を引退し、先生からのご指導にも区切りがつきます。この1年半、私のお稽古とお茶会のために働きかけてくださり、先輩方でも経験できなかったことを経験させていただきました。そのため、引退・廃部という節目にこの言葉をいただけたことに意味を感じています。

話は変わりますが、私には2年間の部活動の中で特に心掛けていたことがあります。それは、「一碗のお茶に心を込める」ということです。先に書いたように、私は1年以上、一人で活動してきました。一人での活動は、先生と1対1でのお稽古が多くできるという利点もあります。一方で、部活動に関することを全て一人でこなさなければなりません。それは、お茶を点てる回数も然りです。1回のお稽古、1回のお茶会で数人から数十人分のお茶を点てます。そのような時こそ、私は自分にこの言葉を言い聞かせてきました。私がお稽古をして少しずつ上達したとしても、目の前でお茶をお出しする相手には、それが初めてのお茶になるか、最後のお茶になるかは分かりません。私にとっては数碗分の一碗だとしても、相手にとっては最初で最後の一碗かもしれません。だからこそ、私の拙いお点前で喜んでいただくには心を込めることだろうと思い、2年間活動してきました。部活動で培ったこの心は、将来の糧になると思っています。

私は、仲間と泣き笑いながら過ごすという熱い部活動を経験することはありませんでした。しかし、茶道を教えてくださいました先生、顧問の先生、優しい先輩方のおかげで、お茶のように爽やかに温かい時間を過ごすことができました。私の茶道人生はここで一旦幕を下ろします。再び幕が上がるかは分かりませんが、たとえお茶の道を離れたとしても、茶道で学んだ作法や心遣いを心に刻んで生きていきます。